

甚吉森

高知県東部の最高峰。千本山の北にそびえる甚吉森。奈半利川の源流であり、年間降水量は4,000mmを超す。徳島県との県境の尾根はゆるやかなので、魚梁瀬の山をよそしくつつみこんでいるように見える。千本山からは古い大きな切株が点々として尾根を北へ進む間伐跡の中ピークを下ったコルで道を見おとさぬように慎重に登って小谷をわたす。若い広葉樹林とちどりながら高度を上げていくとやがて樹が広げて杉の巨樹が点々としてくる。巨杉を見上げながら登れば、大きなフサの太木に出会うとまもなく頂上にたどり着く。千本山方面からえんえんと歩いてきた魚梁瀬の山の雄姿さらにくると見わたると四国の東部の素晴らしい山々が目の前に広がり感嘆がある。暑いけれど、まとも「来てよかった」と思える静かな名峰である。

屋島や塩浦の戦いに敗れた平家一族が四国山地の奥深淵源氏の追手から逃れ敗走した。人跡未踏の奥山に分け入り、断崖や激流を越え土佐の奥地へ潜入していった。塩浦で戦死したとされる門脇中納言「平経教」は祖谷から那賀川をさかのぼり、御朱印谷に入り、南に見えるゆるやかな山(甚吉森)を目指し「あの丸山がよい」「山上からの御朱印がよく、甚だ吉なり」と言って一行を元気づけたとこれ千本山に向かって尾根道を進んだ。山を下った谷を「一の谷」「二の谷」と命名し、付近に屋敷をかまへ、石仙の峰に薬師如来を安置して落し居宿をつくら。魚を釣る「魚梁」を流したことから「魚梁瀬」の地名を残しここを門脇平家の祖の地と伝えられている。

千本山-甚吉森 約2~3時間。中川林道からのルートもあり。

山に行き山道を歩み、何かを良い感じに帰るとそれを感じる。思い出すためにまた山へ行き山道を歩み、それを繰り返している。

山歩きの鉄則は無事に家まで帰ること。

ヤナセキ 足元3つめ

千本山をすぎると尾根にはタヌキのタヌキがタヌキと見られるようになる。

いろはにカエテ

- ① アサヒカエテ
- ② イロハ
- ③ ウリハダカエテ
- ④ エンコウカエテ
- ⑤ オオイタカエテ

馬路村の鳥オオドリ

植の木がほらほら

又夕場

千本山

ツルシ

ツルシやツルシなどミカン科の植物には有毒物質があり...



高知県東部 最高峰

降る雨と那賀川と 奈半利川に分ける

那賀町

魚梁瀬

甚吉森

1423m

二等三角点 明治二十五年と 刻まれた石碑がある。

あの森は 甚だ吉なり!

ツギツギの生息する 金山山系とつながる 尾根なので、彼らの 行動範囲。 彼らとは接触せずに 遠くの友人として共存しよう。

馬路村の5年寄の中には サムライ屋敷イモと呼ぶ人もいる。 屋島の源平合戦に敗れた 平家の落人がもたらしたと 由来している。

平地師と甚吉森の尾根

山から山へと漂泊を続けた山の民平地師。ろくろを使い、おわん、九膳杯、お盆などを作る木工技術集団。中世の近江の山で生まれ、全国の深山に良材を求めてさまよいながら生計を立て、明治の始め頃から姿を消していった。平地師の本拠地近江の筒井八幡宮は、何年かごとに「真国入」という巡遊者に全国を回らせ、平地師から奉加を求め、「氏子狩り」を行っており、その記録から寛政7年(1797)9月24日、甚吉森の尾根を通り魚梁瀬川真国入が来た記録がある。源平の昔から瀬戸内と魚梁瀬は確かにつながり、平地師山伏、獵師、山人、鉦山、修業者など山を生活の場とした人々がこの尾根を通って行った。(四国百山より)

甚吉森の尾根は 西之山-おほけね 湯桶丸へと 延々と続いている。 なんとおほけねも 尾根だ。 いつか歩いてみたい。

魚梁瀬六木 スギ トガサワラ ヒノキ モミツカ ヲウヤマキ

大人が寝るの30分程 大きなものもある。

うーむ この 不思議の 出来事...

余談ながら 安芸市の境にある 御己屋山(みよのやま) (安芸は横山 保護林)の山名は かつての山に 住んでいた平地師 巨木が備前作の である木を栽培 していた。 横山を作る山の小屋 が転じて御己屋山 となった説がある。

昔の人が伐った 大きな切株で 一木だけ

子どもの頃、山に遊びに行く時は 祖父がよく「タヌキはマユモの敵を 敵えて人をはかる。ほかこれん ように、まろツツバとマユモにつけ 回って、言われたんのようにして行か と教えられた。 マユツバという言葉があるが、 胸にマユモにツツバとつけることで、 見を抜く。道に迷わぬ山では、 いくつも見つけると、まよふよと、 いうことだったのだからと大人に なる。

所々古い道があるが 中川と西川の間の 尾根を通ること。

大きな切株がずっと 続いている。

木の尾根

又夕場

千本山

ツルシ

ツルシやツルシなどミカン科の植物には有毒物質があり...

